

第12回 札内川技術検討会が開催されました



第12回札内川技術検討会の様子（帯広第2地方合同庁舎にて）

第12回札内川技術検討会が平成31年2月21日（木）に開催されました。

札内川技術検討会 委員名簿（敬称略、五十音順）

氏名	所属等
泉 典洋	北海道大学大学院 公共政策学連携研究部 教授
斎藤 新一郎	環境林づくり研究所 所長
中村 太士	北海道大学大学院 農学研究院 教授
藤巻 裕蔵	帯広畜産大学 名誉教授
村山 雅昭	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 水環境保全チーム上席研究員
柳川 久	帯広畜産大学 教授
矢部 浩規	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム上席研究員
渡邊 康玄	北見工業大学 教授
オブザーバー	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所

【第12回検討会の議題】

- (1)平成30年6月の中規模フラッシュ放流による河道内変化状況
- (2)平成30年の魚類・底生動物及びチドリ類の生息状況
- (3)平成28年8月出水後におけるヤナギ類実生の侵入状況
- (4)平成31年度札内川自然再生（礫河原再生）実施計画書（案）

【委員からの主な意見】

議題(1)「平成30年6月の中規模フラッシュ放流による河道内変化状況」に関する意見

- ・平成28年出水により、礫河原の水面比高差が大きくなった。冠水しないことによる再樹林化が最悪のシナリオである。全川の比高差の状況等をまとめておいた方が良い。
- ・中州へ流路を分岐させることにより主流路が埋まる。それはすごく効果的だと思う。
- ・二極化が進行する方向になっている箇所があるかもしれない。マイナスの部分にも注意して管理した方が良いと思う。

議題(2)「平成30年の魚類・底生動物及びチドリ類の生息状況」に関する意見

- ・今年度のチドリ類確認個体数が昨年度より減少したようだが、十勝川水系全体で減少し、その影響で札内川も減少したのか、現時点では減少した理由が分からない。

- ・魚類・底生動物については、これまでの調査により、フラッシュ放流や出水による大きな影響は生じていないと結論付けて良いと思う。

議題(3)「平成 28 年 8 月出水後におけるヤナギ類実生の侵入状況」について

- ・ヤナギ類は 1 回伐っても栄養繁殖する。そこで、1 回伐り、栄養繁殖して栄養を使ったところで地際で再度伐れば、もう繁殖できない。ヤナギ類の管理には有効な手法である。
- ・ただし、ヤナギ類も河川生態系に必要な種なので、消失すると問題である。10%くらいは河畔林として残すと良い。
- ・ケショウヤナギを保全するととても良い取り組みだと思う。

議題(4)「平成 31 年度札内川自然再生（礫河原再生）実施計画書（案）」について

- ・置砂にどの程度の効果があったのか、現時点では分からない。効果を把握するためには、対照区を設置するなど、何か工夫が必要だと思う。
- ・流木繁殖の場合、横たわった根株があり、地中でつながっているため、なかなか流されない。このように繁殖した流木は、天地返し等で対応した方が良い。
- ・新たに流路引込 N 工区を設置した方が冠水範囲が広がると予測されている。上流端の境界条件が少し変化したことにより、下流の状況が多少変化するという事は起こり得る。工区を増やせばこのような状況は増えると思うが、どこまでやるかということだと思う。
- ・どこかに引込むことにより、その下流側で現況と異なる変化が生じるのであれば、それは効果と言えると思う。
- ・モニタリング計画については、今後は河川水辺の国勢調査も環境 DNA 技術を併用し、効率化していく流れだと思う。今後は、環境 DNA 技術を併用することにより、将来のモニタリングにも活かしていけると思うので、検討すると良い。

■今後の予定

- ・本日の議論を踏まえ、実施計画書の見直しを行い、関連する調査、検討の準備を進めていきたいと考えている。
- ・平成 31 年度のフラッシュ放流については、今後の融雪期の状況を踏まえて検討し、計画を立てた段階で改めてご連絡させていただき、引き続きご指導をお願いしたい。

【お問い合わせ先】

札内川技術検討会事務局：北海道開発局 帯広開発建設部 治水課 札内川技術検討会担当まで
帯広市西 5 条南 8 丁目 TEL：0155-24-4105、FAX：0155-27-2377
～札内川技術検討会は公開です。どなたでも傍聴していただくことができます～